シェイク！

雨宮　透子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シェイク！

【Ｎコード】
Ｎ９１６３Ｍ

【作者名】
雨宮　透子

【あらすじ】

終業式も終わり、のんびりと過ごす夏休みの始まり。
その夜ふとアイスを買いにコンビニへ行ったことで、優の夏休みはとんでもないことに。
コンビニの前で出あった、同じ学校の美少女、千草に散々振り回される夏休みが始まった。
常識人ＶＳ非凡人。
夏の暑き戦いが始まる！

ＳＳ形式で、いつもよりセリフ多め描写少なめの読みやすい感じを目指してます。

非常識との遭遇。（前書き）

終業式も終わり、のんびりと過ごす夏休みの始まり。

その夜ふとアイスを買いにコンビニへ行ったことで、
優の夏休みはとんでもないことに。

コンビニの前で出あった、同じ学校の美少女、千草に散々振り回される夏休みが始まった。
毎日のように押しかけてくる千草にしぶしぶながらも付き合うことになり、
優の夏休みは予定とは違う方向へと動き始める……。

常識人ＶＳ非凡人。
夏の暑き戦いが始まる！

ＳＳ形式で、いつもよりセリフ多め描写少なめの読みやすい感じを目指してます。

非常識との遭遇。

夏、本番。

バカみたいに暑いな、と太陽をけなした。
優は夜になったらコンビニにアイスでも買いに行こうと思った。

今日は終業式で、しばらく学校とはおさらばだ。
補習なんて受ける必要も無い身。
しかし、折角の高校一年の夏。
一生に一度しかない、夏……。

やっぱり何かが足りないよな、と頭を掻く。
別に彼女が欲しいわけでもないし、みんなで遊びに行くのが苦痛なわけではない。
誘ってくれる友人たちがいるのは、ありがたいことであるう。
しかし、夏休みに突入したその日の夜からやる気が無くなった。
することが無い。
まあいいか、と財布だけを持ち家を出る。

妹の真緒に捕まり、アイスは二本買うはめになった。
自転車で風をきりながら近所のコンビニへと向かった。

コンビニに入ろうとした時、ドアの横で、明らかに機嫌の悪そうな女の子を見かける。
しかも同じ学校の制服を着ている。
触らぬ神には祟りなし、気がついていないふりをしてコンビニに入

った。
可愛い子だったなーと思いながらアイスを選ぶ。
目的のアイスとついでに炭酸をレジで支払っている間も
その後姿が窓越しに見える。
こんな時間に女の子が危ないよなーと思ったが他人事である。
ちらっと見ると、目が合う。
ヤバイ。と本能が言う。
明らかに何かにふてくされている。
無視しようとするが、声をかけられ静止する。
「そのシャツさー、うちの学校のだよね」
パチンと携帯を閉じて優を見る。
つかつかと歩いてきたかと思うと、ずいっと顔を寄せられる。
良く見ると、可愛いというよりもすっきりとした顔立ちだ。
長い真っ直ぐな黒髪と、大きな瞳。
そこにうつっているのは優。
しまったーと自分の怠惰に後悔する。
「しかも同じ一年かぁ」
「俺急いでるから」
「なんで」
「アイス買ったから」
「じゃあ今食べれば？二つあるんだったら一個ちょうだいよ」
うわー、なんて図々しい女なんだと思いながらも、
仕方なく真緒の分を渡してしまう。

まぁ高いものでは無いが、初対面の相手に普通アイスを要求するだろうか？
常識人ならするわけながない。
ということは、彼女は自動的に非凡な人間だということだ。

「あんたさー、夏なんか用事ある？」
半分ぐらいまで並んで食べていた。
唐突な質問に優は一瞬考え込む。
「宿題くらいかな」
「ふーん。ゲームとかネットとかしないんだ」
「ああいのはちょっと苦手でな」
実際はネット漬けな毎日だが、正直に答える筋合いは無い。
「……不甲斐ないな」
「悪かったなぁ！」
「あはははははっ」
優には何が楽しいのかわからない。
「あたし千草。あんたは？」
「優。クラスは？」
名前しか名乗らなかったので、こっちも同じように返す。
「特進コース」
「マジでっ？！」
驚き、アイスを落としそうになる。
通っているのはこの辺りでは一番レベルの高い公立高校だ。
その特別進学コースと言えば、有名大学の合格者を次から次へと輩出している。

「ねえ、ケータイアドレスと番号教えてよ！」
またアイスを落としそうになる。
この流れで何故初対面の同級生にそんな大事なものを教えなければ

いけないのか。
実に理不尽である。
しかしその瞳を見ると、不思議と説得されてしまう。

「どうせ暇なんでしょ？夏休みの間だけつきあってよ！」
「つきあうって、お前何言ってるか自分でわかってんのか？」
「そーいう意味じゃなくって、私は今年の夏を満喫したいのよ。それにつきあって欲しいの」
可愛くウィンクしてみせる。
なんと卑怯なと、がっくりする。
「何で俺が」
「アイスくれた恩返しに」
ふふんと胸をはる千草。
お前がくれって言ったんだろうが！と言いたかったが我慢する。

「じゃあこれ、あたしのアドレスね！」
強引に紙っきれを渡される。
「とりあえず、今すぐ登録して私にメール送って」
なんだよそれ。と思うがこの小さくて可愛らしい生き物には勝てない。
仕方が無くメールを送ると。

「じゃ、明日からよっろしくねー！」
敬礼のポーズをし、くるりと背を向けてすたすたと歩いて行く。
一体何だったのか。
わからない。
一種の通り魔か何かか？と思うが、今の所、危害を加えるような行動はとっていない。
ため息をつき、仕方なく、またコンビニへ入った。
妹のアイスを買うために。

非常識との遭遇。（後書き）

八月は文章力強化月間、というわけで、
苦手なジャンルに挑戦してみることにしました。

毎日お話をお届けできればなぁと、意気込んでおります。
なるべく更新がんばります。

よろしければ最後までお付き合い頂けると、嬉しい限りです。
どうぞよろしくお願いします！

一日目・セミとり。

目覚まし時計は八時にセットしていたが、大音量で飛び起きたのは七時だった。
携帯が鳴っている。
寝ぼけながらも慌ててとる。
『おっはよー！』
頭が痛くなった。

やはり昨日の嵐のような女の子、千草は夢ではなかった。
夢であって欲しかった。
ちくしょうと思いながら携帯を握る手に力が入る。
「何がおはようだ！まだ七時だぞ」
『えー？学校じゃ普通じゃん』
まあ、そうだよな、と納得してしまいそうになるがもちろんしない。
「もう夏休みだろー。わざわざこんな時間に起きなくたってもいいじゃないか」
あくびをしながら抗議する。
『夏休みは限られてるのよ！寝てすごすなんてもったいないじゃない！』
「お前はそーすればいい。俺は大人しく夏休みを満喫する」
『じゃあ満喫しに行こう！』
なぜそうなった？
「お前さー」
『ち・ぐ・さ！』
「はいはい、千草は朝から元気そうだが何をするつもりだ」
『優の家に遊びに行く！』

「ちょ、何言い出すんだよ！」
『実はもう家の前まで来てしまっていまーす』
慌てて窓を開けると、携帯を片手にして千草がにこにこと笑いながら手を振っている。
「絶対に玄関のベル押すなよ！」
『聞こえなーい』

ぴーんぽーんぴーんぽーんと、聞きなれた音が下からする。
千草は携帯をしまい、玄関が開く音がるす。
最悪だ。
「初めまして、優の友達の者です」
にこっと笑って首を少し傾ける。
「あら、綺麗なお嬢さんねぇ。暑かったでしょう？どうぞ入って入って」

いや、入ってくるなと！と思いながら慌てて着替える。
もう寝癖はしかたがない。
階段を急いで下りて行くと、アイスを食べている真緒に遭遇する。
「お兄ちゃんの彼女すっごい美人だね！どっちから告白したのー？」
うるさいと質問を蹴っ飛ばし、リビングに出る。

千草は冷たい麦茶を飲みながら、母と会話をしていた。
ほんと最悪だ。
「あんたいつまで寝てんのよ、千草ちゃん待たすなんてお母さんが恥ずかしいわ」
こっちの方が恥ずかしいわ！と、千草を睨む。
もちろん涼しい顔してお茶を飲んでいる。

いくらなんでも展開早すぎだろ。
昨日の夜に会ったばかりなのに、さぞ普通に人の家に上がっている。

恐るべし。

「優くんごめんねっ」

そう言いぱんっと両手を合わせて頭を下げられる。

絶対嘘だ。

「それではここで失礼します。お茶ありがとうございました」

にこにこ。

母がすれ違いざまに横っ腹をつついてくる。

「あんた良い物件見つけたわねー」

「そんなんじゃねーよ」

ちっと舌打をし、のんびり茶を飲んでいる千草の前に立つ。

まるでお嬢様の食後の紅茶のように優雅なしぐさ。

「朝っぱらから一体何のようなんだよ」

「昨日夏休み満喫するの手伝ってくれるって自分で言ったでしょ？」

「言った覚えがねぇ」

きっぱりと言う。

「残念な脳ね」

あーあ、と千草はため息をつく。

半分、いや、それ以上バカにされている。

特進コースだからと言って、ここまで人を振り回すとは……

はっきり迷惑だ。

「お前なぁ……」

「だから千草だってばー。さて、今日の予定をこなすとしますか」

俺は改めて千草を見る。

「はぁ？」

「夏休みをフルに活用するために予定をたてました！」

「そんなもん立てんでもいい」

切り捨てる。
「夏休みは計画的にって小学校で習わなかったー？」
今、高校生だ。
やっぱりバカにされている。
「今日はセミをとりにいきます！」
「はぁ？！」
その唐突な案に優は思わず大声をだしてしまう。
「なんでセミ……」
「うるさいから」
「えー」

がくっと肩を落とす。
お嬢様っぽいのはただ外装が良いだけだと確信した。
ほんとどうして自分が、この年になってセミをとらなければならないのかとうんざりする。
まあ小さい頃はセミ取りぐらいして遊んではいたが……。
なんで今さらセミ……。

しかもうるさいとかとんでもない理由で。
生き物の命は大事にね！と小学校で習ったのを思い出した。
「真緒ちゃんまたねー」
「いつでも遊びにきてね千草お姉ちゃん！」

おいおい、どういうつもりだこの二人。
もう二人が結婚すりゃいーじゃんなんて思いながら、靴を履く。
かごとあみは二人分ちゃんと準備されていた。
まったく抜かりがないなと優は頭をかく。
とんとんっと靴をきちっと履きながら千草にたずねる。
「んで、どこにとりに行くんだ？」
「紗奈部神社」

「かなり本格的だな」
あそこは結構穴場だ。
森は昼でも薄暗いので、小さな子どもたちはあまり入らない。
「えーっと、一人二百匹づつね」
「にひゃくっ？！」
アホだろ。
と優は思う。
そんだけとって一体どうするんだ。
唐揚げにでもして食べる気なのだろうか。

そして地獄のセミ取りが始まった。
なんでこんなに、とびっくりする。
セミの羽音で、かなり近づかないと会話が聞こえない。
「さっさと始めようよ！！！」
「わかったよ！！！」
優は諦めて、あみを構えた。

「日陰のくせして、あっついんだよー！」
バシっと狙いを定めて、一度に二匹ゲットした。
よっしゃ、と思いかごを開けた瞬間、
ぶわっとセミが飛び出す。
しまった！と思った時にはすでに遅し。
苦労して捕まえたセミのほとんどがまた森に戻っていった。

あーあー俺のセミがーと優が嘆いていると、がつんっと脳天を殴打される。
いってーと思い振り返ると、怒った顔で千草が立っている。
そりゃー怒るよな、と優もしぶしぶと納得する。

そこへ神主さん、だが上下ジャージ姿のおっさんが現れた。
「おつかれさん、どうだい？はかどってるかい？」
「はいっ！」
何だ、その様の代わりようは……。と思わずにはいられない。
「若いのに良い子だ。お茶とお菓子を用意しておくから一区切りついたらおいで」
天の助け！やっと自分にも運が回ってきた！と思い万歳をしそうになる。
「はい！もうちょっと頑張ってから行きまぁーす！」
きゃっきゃとはしゃぐ千草はどう考えても演技だ。

「さー、とっととセミとるわよー！」
「おー」
と、優は気の抜けた返事を返し、また森の中へ入っていった。
今度はゴミ袋を手に。

相変わらず、森はセミの声でいっぱいだ。
優は段々とイライラとしてくる。
風情だと思える範囲を軽く超えている。うざすぎる。
袋がいっぱいになったので、一度森を出る。
そこには二つゴミ袋がぱんぱんの状態で置かれている。
優が手にしているゴミ袋と差が激しい。
新しい袋を持って、また森へと戻る。

その途中で、一生懸命あみを振り回してる千草の姿を見かける。

一生懸命に走りまわりながら、次々とセミをつかまえているた。

優は思い返す。

そういえば、幼い頃はセミをとるのが得意だった。

みんなに、母親に、妹に自慢げに見せていた。

そして夜には放してやっていた。

袋がいっぱいになるまでとりつづけ、また戻る。

新たに三つゴミ袋が増えている。

すごいな、と思いながら、はめていた軍手を外す。

丁度そこにジャージのおっさん、もとい神主がひょっこりと顔をだす。

「あ、すいませんまだかかりそうです」

優は軽く頭を下げて申し訳なさそうに笑うしかない。

「そんなこと気にしなくていいんだよ。こんなに捕まえるなんてすごいなぁ」

「ほとんど僕じゃなくって千草が捕まえたんですよ」

苦笑。

「千草ちゃんは本当に良い子だなぁ。まさか本当に着てくれるとは思っていなかったよ」

「え？」

優は驚く。

千草がセミを取りたくてただ押しかけたわけではないのか？

お茶とお菓子に目がくらんで。

「いや、うちの裏の森でセミが以上繁殖してしまってね。

殺虫剤をまくわけにもいかないしこの年でセミを捕まえるのも難しいもんでね」

確かにご老体にはキツすぎる作業だろう。
「横断歩道で一緒になった時に荷物を持ってくれてその話をしたら、じゃあ自分が手伝うって言ってくれて嬉しかったよ」
「そうなんですか」

なんだ、良い所あるじゃん。
なんて千草を少し見直す。
「業者に頼むっていう手もあったんだけど結構値段がなー」
「ああ、そうですよね」
「それをあの子は無償でやってくれてるんだよ。本当にありがたい」
そう言い、にこにこと笑う老人の姿は、なんだか寂しかった。

「ちょっと優！何ぼさっとしてるの！」
神主のおっさんが去った後、少し休んでいると千草が現れた。
手にはまた袋を持って。
「そろそろ休憩しようぜ」
「まーだー！」
とんっとあみを地面に刺す。
「神主さん、喜んでたぜー」
「……別に。あたしはただセミ捕まえたかっただけだし」
「今日はこの辺にして、明日また来ればいいじゃんか」
「明日は明日の予定があるの！」
千草が断言する。

なんか忙しそうな夏休みだなぁと他人事のように思う。
一日目はそんな風に終わった。

二日目・パフェ。

ああ、携帯が鳴ってる。
誰だよこんな朝っぱらに電話かけてくるやつなんて。
と、寝ぼけながら出ると
『おっはよー！』
「お前……」
優は頭をかく。

さっきまでなんか幸せな夢を見ていた気がする。
それを突然起こされ、機嫌が悪くなったっていいじゃないか。
『今日の予定なんだけどー、パ』
「朝早くから電話するのやめてもらえる？」
『今何時だと思ってるの？』
「六時半です」
『太陽昇ってるよね』
「昇ってるな」
カーテン越しに太陽が透けて見える。
『朝だよね』
「早朝だな」
そこは譲らない。
『何ー？昨日のだけでもう疲れちゃったの？夏休みまだ二日目じゃない』
「その一日目を千草がぶんどっていったけどな」
『えー？嫌なら言えばいいのに』
「うるせー！」
『イライラしてるなぁ。暑いからかしら？そんな日に今日はぴった

りの夏休みよ！』
「やめろ、何も言うなっ」
『巨大パフェ食べに行きます！』
「一人で行ってこい」

ああ、あの有名な巨大パフェか……
何度か友人とトライしたが途中でギブアップした苦い思い出。

『五人前あるんだって！昨日の夜電話で予約しておいたから、十時に駅前ね！』
「行かん！」
と、優が答えると、てのひらを返したように、優しい声になる。
『じゃあ迎えに行くよ』
「来るな」
『真緒ちゃんも一緒に行かないかなぁ』
「勝手に人の妹てなずけるな」
『そんなつもりはないよー。じゃあ九時に駅前で！』
「なんか時間かわってるぞ……」
『細かい事は、気にしなーい気にしなーい！』
「お前っ……」
『んじゃ！』

そう言って、電話はぷつりと切れた。
リダイヤルするのもしゃくなので携帯を放り出す。
九時に駅前……八時に起きれば間に合うよな、とふとんにダイブ。
そのまま意識が遠のいていった。

「お兄ちゃぁーん！」
ぐはっと突然の重りに体が悲鳴を上げる。
「お兄ちゃん！起きて！」

ぺしぺしと頬を叩かれる。
無邪気なその笑顔に文句が出ない。
妹の真緒は自慢できるぐらい可愛かったし性格も良い。
そして大のブラコンであった。

「ちーちゃんきたよー！」

ちーちゃん？誰だ？優は考えながら起きるが、思い当たり、飛び起きる。
時計は十一時半だ。
「まさかっ」
「おっはよー優」

そこには制服姿の美少女が立っていた。
ああ、なんてこったと優はふとんにもぐりたくなる。
遅刻してしまった。
絶対怒っている。絶対に。
「リビングで真緒ちゃんと遊んでるから早く用意してよね」
まったく、という顔でため息をつかれる。
「わかったから部屋から出ていってくれ」
「むさっくるしい男の部屋なんて好んで見るわけないでしょ」
「ちーちゃんー行こー」

制服にぎゅっとしがみつく。
千草は真緒の頭を撫でてやりながら、部屋を出ていった。

ああ、やってしまった。と、後悔しても遅い。
たった二日で部屋までの侵入を許してしまった。
大失敗だ。

もういっそのこと引きこもってしまいたいと思うが、
妹が再度呼びにくる。
起きるしかない。

嫌々階段を下りて行くと、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。
千草と真緒、おまけに母親。
入りにくいなぁと我が家なのに感じる。
なぜこうなったのか……。
あの日あの時間にアイス買いに行かなければよかったと
今さら後悔しても遅い。

「ちぐさー」
玄関から声をかける。女三人集まって何が楽しいのかさっぱりだった。
優はどちらかといえば、一人でいる方が好きだった。
その点では、千草と似てるといえば、似てるかもしれない。
「えーもう行っちゃうのー？」
「また遊びにこさせていただきます」
「何か美味しいもの用意しておくわ」
なんだよーと、いじける。
「外見が良いと特だよな」
嫌味混じりで千草に言うと、無表情でピースをしてみせる。
「まあねー」
さらりとした髪を耳にかける。
その仕草だけ見ていれば、綺麗な子だなあと思うだろう。

しかし千草は口が悪い。
「所詮、世の中顔でしょ」
千草が言うと現実味が沸いてくる。

どんな人でも無意識に美人は好きである。
大昔の人も言っていたしな、と思い出した。
「優もかっこいーじゃん」
「褒めても何も出ないぞ」
そう言い、猛暑への扉をひらいた。
今日も絶好調、暑い日だ。

しばらく歩き、駅の近くまでいくる。
店に入ると、千草がカウンターで説明している。
ああ、なんで夏休みがこんなことに……と、後悔する。
金魚鉢の巨大なアイスを見てしまい、ぞっとする。
山のように盛られた、三色のアイス。
バニラと苺と抹茶だ。

その大きなパフェを見、千種はご満悦なようだった。
今からこれ全部食べれないと帰れないんだぞ、ということは黙っておくことにした。
「じゃあ食べますか！」
実に嬉しそうな千草。
いきなり抹茶に手をかける。
卑怯だ。
一番楽なのを取られてしまった。
優はしかたなく、バニラアイスにスプーンを刺した。

「んー！美味しい！」
一口目の感想だった。
すぐにお腹いっぱいになる。
「苺味も食べて良い？」
「好きにしろ」

そう言いながら、女の子と同じアイスを食べるのは初めてだな、と優は思った。
間接キスかーと思いながらも、千草は気にもせずに、いそがしそうにアイスを食べていた。

そこから先は驚いた。
ぱくぱくと次から次から口の中に入れていく。
常人の沙汰ではない。

なんとなく、優も気持ちをリセットしスプーンを持つ。
食べることに集中する。

しかしすぐに腹が悲鳴を上げ始めていた。
そりゃ急にこんな冷たいもの大量に食べたら、
だれだって気持ち悪くなるわ！と言いたいが
今目の前で一生懸命、しかも楽しそうに食べてる千草に愚痴などこぼせるわけがない。

千草はどんどんとパフェを食べていく。
時間がたっても相変わらずもぐもぐと食べていた。
長い手足と白い肌、身長も優と同じぐらいある。
女子としては背高い方だよな、と思う。
そして何よりも、その整った顔立ち。
今日は髪を下ろしてきているので、邪魔そうにする。

「ごちそうさまでした！」
満足そうにソファーにもたれる。
千草が全部食べ終わったのは、
優がアイスで冷えた体をなんとかコーヒーで暖めようと飲んでいる頃だった。

それにしてもでかかった。
しかもほとんどを千草が食べた。
ああ、何と不甲斐ないと優は自分を叱咤するが
もうお腹いっぱいすぎ、何も喋れない。

会計を済ませて、けろっとした顔で千草が言う。
「結構おいしかったねー」
「……まあなー」
「夏休み終わるまでにもう一回はきたいなー」
きらきらとした目で、ディスプレイされている巨大パフェをしみじみと眺める。
「その時は俺を誘うな。いい迷惑だ」
「でも美味しそうにアイス食べてたじゃん」

確かに、まあなーと思うが最初だけだった。
すぐに優はダウンし、残りは全部千草が食べた。
何かと戦うような厳しい目つきでどんどん食べ進めていった。

「パフェってとっても美味しいのねー」
「好きなんだろ？」
「今日初めて食べた！」
あっけらかんと言う。
「え、パフェを？」

優は驚く。女の子は甘いものが好きで、
お菓子やジュースが大好きだと思っていた。
「うん……一人で行くのも寂しいしさ」
少し下を向いて話す。
「今度はさっ、クレープってやつが食べたいなぁ」

気まずくなりそうな前に千草が笑いながら
優は立ち止まる。それに気がつき千草が振り返る。
「クレープぐらい今日食えばいいじゃんか」
「え？」
千草はぱちぱちと瞬きをする。
「こっからすぐだよ」
駅に近いショッピングモールの中に入っているのを覚えている。
「でも今日はパフェ食べちゃったからなぁ」
「お腹いっぱいになった？」
そう聞くと、勢いよく返事が返ってくる。
「まだ大丈夫ー！」

嬉しそうな笑顔がなんとも言いがたい。
「でも、そしたら夏の予定が……」
優はため息をつき、じゃんけんの、ハサミのように指を曲げる。
「少し寄り道するだけじゃん。
クレープはおいしいぞ！さあ、食べるか食べないかどっちだ！」

ずいっと伸ばされた指に千草は驚く。
千草はなんだか嬉しくなってくる。

「じゃあ食べにいくっ！」

慌てて指を掴んだ。
曲がる方向と反対に。

三日目・採掘

今日は、目覚まし時計のおかげて起きれた。
今日も千種くるのかな、と思いながらリビングに下りると、
まただった。
また。

「お兄ちゃんおはよう！」
妹の元気良い朝の挨拶。
「優くんおはよう」
そして柔らかくなめらかな声で千草がにっこりと笑う。
「どうしたのそんな所でつったって。
千草ちゃんわざわざあんたの心配してお見舞いに来てくれたんだよ」

あう、と人差し指が痛くなる。
昨日、千草が嬉しさのあまりに、
見事に指を違う方向に曲げられ、
優は病院へ行くはめになった。

手にはぐるぐるにギプスを巻かれ、指は曲がらない。
医師いわく、しばらく固定しておけば、自然に治るとのことだ。

そしてその実行犯が目の前にいる。
憎い！が、わざとでは無いので責めるにもちょっと気がひけてしまう。

「今日は何の用だ。俺だって暇ってわけじゃ」

まあ宿題はほとんど終わらせが。こんあのに付き合ってられるわけがない。
「今日は化石の発掘にいっきまーす」
脳天気に声高々、今日の予定を発表される。
「アホか」
この暑い中で発掘とか、しんどいだけだろう。
「なんでー？男のロマンでしょ？」
不思議そうに千草は首をかしげる。
ロマン？どうしてそこでロマンが出てくる？
優は理解できない。
「残念ながら、まだロマン見つけてないので」
「じゃあ今日頑張らないとねー」
「なんでそういう流れになる」
「そう？結構遠いから電車乗る」

千草は上機嫌で、子どもみたいだった。
うんざりとしながらも、行くしか道は無い。

「じゃあ、ちょっと今日遅くなるかもしんねー！」
大きな声で母に告げると、
「千草ちゃん気をつけてねー」
「はーい！行ってきます！」
うちの住人でも無いのに、行ってきますってどうなんだよ、と、思いながら家を出る。

しばらく電車で揺られ、着いた駅は無人だった。
「すごい田舎だなぁ」

電車に揺られること一時間。
景色は段々と緑が増えだし、人家を通りこした。

おもいっきり伸びをすると、背中がパキポキ鳴る。
「ここら辺昔は海だったんだって！」
「ふーん」
ミネラルウォーターを飲みながら優は適当に返事しておく。
「海だよ！信じられる？！すごくない？！」
この暑さで、よくそれだけはしゃげるな、と感心する。
優はとりあえず日陰を探すがどこにも無い。
暑い。
なーんにも無いなーと思っていたら、車のパッシングが響いた。
「ようこそ化石の町へ！」
窓から中年の男が手を振っている。
事前にガイドを頼んでおいたと千草が行っていたので、間違いないだろう。
「今日は一日どうぞよろしくお願いします」
優が頭を下げて挨拶をかわしている間に、千草はちゃっかり後ろの席に座っていた。
優は助手席に座らせてもらい、何も無い道をおんぼろ車で走り出した。

ついたのは、何も無い岩場だった。
色んな場所に穴がある。まさかとは思ったが、やはりここが採掘所で間違いなかった。
ヘルメットと軍手をすると、暑くてたまらない。
そして手には重たい鶴嘴。
優は指を固定しているので、片方しか手袋がはめられない。

「化石なんてそんなほいほい出るもんなんですか？」
ふとたずねてみると、渋い表情をする。聞かずともわかった。
「まあ、出るっちゃ出ますけどそんな大物はまず出ないですな。木の葉とかそういうのが多いです」

「絶対恐竜見つけてあたしの名前つけるんだから！」
おい、人の話をお前聞いていたのかと言いたくなる。
恐竜なんて今さら出てくるわけがなかろうに。
しかも自分の名前をつけるとは……バカだろ。とため息。
「さぁ！いざ勝負！」
「誰とだ」
「地球と」
なんて壮大な勝負だ。
まあ頑張れと声をかけ、優は日陰を見つけ、スコップで土をつついて過ごした。

お昼にと持ってきていたお弁当は千草がぺろりとたいらげる。
優はなんとかおにぎりは死守しもぐもぐと食べる。
「恐竜出てきそうか？」
「うん。後もうちょっとって感じかな」
ほんとかよーと笑うと、千草は怒ってふくれる。
「そっちはなんかでたの？」
「何も」
むーと千草は考え込む。優はその間におにぎりをまた食べる。
「よしっ！午後は絶対何かみつける！」
「まー頑張れ」
優はお茶を飲みながら一息ついた。良い景色だった。

「んー……ここが怪しい！」
すでに三時間程、断層を見たり叩いたりしてうろうろし回った。
優は疲れたな、おやつの時間は無いのか？と関係無いことばかり考えていた。
はっきり言えば、クーラーのきいた部屋でゲームでもしながら炭酸

を飲みたい。
なんだってこんなに汗だくになって地面を削っているのか。
言い出したのは全部千草だ。

その千草がよっこいせー！と鶴嘴と大きく後ろへ振りかぶる。
真後ろにいた優までギリギリの距離。
優は一瞬、死ぬかもしれない……と思った。
化石採掘で鶴嘴に刺されて死ぬなんて。

「ちぇすとぉおおお！」
の叫び声で鶴嘴が落とされた。

何か、カツン、という音がした。
え、と優と千草は顔を合わせる。
案外、柔らかな土だったので、手作業で、そっと土を払っていく。

最初は何だろうとわくわくしていた二人だが
出てきたのは海苔の缶だった。
「なにこれ」
面白くなさそうに千草が言う。
「タイムカプセル？」
かな？と思いっていると
「あけるしかないっかー」
「これ誰かが埋めたやつだぞ？」
「だって今日掘り当てたのこれだけなんだもの！
また埋めておけばわかんないよ」
おいおい、勝手に開けるなんて最悪だぞ、と思いながらも
なんとなく中身が気になる。
かぱっと開けると、中にはぎっしりと紙が入っていた。

その一枚を千草がとる。
そしてその下から出てきたものは、手製の漫画だった……。
しかもめちゃくちゃ下手な。
「何これー？」
「これはな、黒歴史ってやつだ」
「いきなりファンタジーなせかいね」
「忘れたいがために、ここに埋めて行ったんだろう」

優はため息をつく。絵も酷いが『すとぉりー』と書かれたその漫画の説明でノックダウン寸前まで行く。
見事にボーイズ・ラブであった。
しかもかなり自由奔放すぎる内容である。

今日一日頑張ったて掘り当てたのは、誰かの消してしまいたい過去。
なによりも発見されてはならないもの、黒歴史を偶然にも当ててしまった。
ほんとすみませんでしたと手を合わせて埋め直しておいた。

夕暮れで空がオレンジ色に染まっていく。
周りに何もないので、綺麗な景色を楽しめる。
しばらく二人は黙りこんで、日が落ちるのを待った。

そして帰りの電車では二人とも寝過ごしてしまい、大変な目にあった。

四日目・カラオケ

「今日はカラオケ！」
ガっとドアを開かれる。突然で少し驚いた。
丁度夏休みの課題をやっている所だった。
「元気だなー」
昨日と疲れがいまだとれない優は恨めしく思う。
筋肉痛で足も手も痛い。適度に運動しないとなーと黒髪の美少女を見る。

この小さな体のどこにこれだけのパワーがあるのか知りたいものだ。
一体何を食べてるのやら……石油か？
「十一時からだから、今日はゆっくりしてていいよ」
「そうかそうか。なら十一時にカラオケ集合でいいじゃないか」
「だって逃げそうなんだもの」
ええ、逃げる気満々ですよと黙って返事した。

「そもそもマイクがもてない」
そう言って固定されている指をひらひらとさせる。
「あんたの右手って何のためにあるの？」
そうですよねー。
左指がだめなら右手を使えとは…。
しかもカラオケごときで。

優はそんなに歌が上手いわけでもないし

誘われないかぎり行くこともない。
　そもそも昨日の筋肉痛がまだ癒えていないのに
右手に負担をかけるなど、なんたることか。

「私は一生に一度のこの高校一年の夏休みを、有意義にすごしたい
だけなの。わかる？」
「それはわかった」
よく理解した。
「付き合ってくれるって言ったよね」
「いいましたね」
あの時の自分を殴りたくなる。
アイスさえ買いにいかなければ……
声かけられても知らないふりをすれば……
この達者な口にだまされていなければ……

　しかし悔やんでも何も始まりはしない。
優は決心した。
今年の夏は千草と一緒に夏をエンジョイしてやる！
と。

「カラオケ！」
と、看板を指差す千草。
「だな。あっつー。さっさと入るぞ」
「はーい！」
元気の良い返事が返ってくる。
優は受付を済ませ、部屋番号プレートを渡され、ドリンクコーナー
へ向かった。
ドリンクはセルフなので自分で入れる。
適当にジンジャエールを入れていると、横で千草が観察している。

「ちーぐーさー」
何してんだよ、と思ったら、どうやらドリンクバーなどは初めてならしい。

少し驚いたがまぁ育ちが良さそうなので知らないものかなと片付ける。
「好きなだけ飲み放題。ただし自分で入れる」
「へーすごいなぁ」
別にすごくはない。
ただ、千草は楽しそうにオレンジジュースをそろそろと入れていた。
その姿が可愛いと思った。

部屋は二人で丁度良い大きさで、内装もしっかりしていた。
カバンを下ろしながら千草に言う。
「先に歌っていいよ」
「ほんと？じゃあ何歌おうっかなー」
嬉しそうに笑い、考えこんでいるようだった。

よく考えれば、現在二人っきりの密室である。
普通ならば何かしら意識してしまいそうがら、相手は千草である。
千草はえーっと、とマイクの音を調節している。
たまにハウリングして、耳が痛い。

そのうちに知った曲のイントロが流れ出した。
これ、歌うの難しいだろうなーと思いながらジュースを飲む。
暑いなか自転車で走ってきたので炭酸が体にしみる。
千草はマイクを手にとり、ぽんぽんと叩き、一人でうなづいた。
そしてあまりの衝撃に飲んでいたジュースを噴出しそうになる。
上手い、上手すぎる。
驚く程、きちんとリズムをとり音程も完璧だった。

透き通る高音、力強い低音、外れないリズム。
今まで聞いた友人の中ではダントツで一番だ。
そこからは、千草の歌謡ショーへと代わって行った。

千草は演歌から洋楽まで、ありとあらゆるジャンルが上手かった。
千草の歌声は、聞いていていてとても心地よかった。
優はしばらくパスをし、ジュースを飲みながら、耳をかたむけていた。

元々、千草の声は好きだった。
少しキツイがよく透る声で澄んでいる。
ので、朝起きた時に聞くその声は結構気に入り始めていた。

いきなり歌声が止む。
なんだろうと千草を見ると、けほけほとせきをしていた。
「喉痛くなってきた」
歌の途中でいきなり千草がマイク片手に言い出した。
喉を押さえながら、困っているようだった。
「そりゃこんだけ歌ってりゃ痛くもなる」
「そっかー。じゃあ帰るかー……」
マイクで呟くと、はっきり聞こえてくる。
「もう？！」
「だって喉痛いし」
まあそうだが。
「そういう問題か？」
一応優は聞くが、千草は首をたてに振る。
「ジュースいっぱい飲んだしー」
そう言ってガラスのコップをつつく。
まあ元は取る分だけは飲んだなぁと優も思う。

千草の性格はたった数日だけで簡単に把握できた。
興味のあることであれば、とことんやりこむタイプ。
その分、飽きやすく、次から次へと何か新しい楽しい事を探している。
でもそれって普通だよな。と優は改めて思う。

カラオケで会計を済ませ外に出ると、むぁっとした空気に包まれる。
蒸し暑い。
息をするのが苦しい程だ。
カラカラと自転車を押しながら、土手を通って帰る。
まだ日は元気に輝いている。
「あー今日はいっぱい歌ったなぁ」
どうやら千草は満足してくれたようだった。
何故か優の方がほっとする。
「楽しかったか？」
伸びをしながら前を歩く千草にたずねた。
「なんで？」
きょとんとこちらを振り返る千草。
「カラオケ行きたかったんだろ？」
「違う」
じゃあ一体なんだったのだろうか？
「ストレス発散にカラオケが良いと聞いて」
「千草のどこにストレスがあるんだよ」
笑いながら言うと、つーんとよそを向いてしまう。
「いや、指悪いことしたなーってちょっと思って……」
え、と思わず優の足が止まる。
千草はそのためにカラオケに行くと言い出したのか？
悪いことしたなーってちょっと思って。
ちょっと？

ちょっとだと？
改めて千草には付き合いきれない。
もうかんべんしてくれと切実に願う。
が、また明日も押しかけてくるのだろうとも思った。

五日目・風鈴

「で、今日は何をするんだ？」
ベッドに転がっている優は天井を眺めながら聞いた。
今日も暑い。
アイス、食べたいなぁと思う。
「風鈴を買いにいきます！」
「あー、うちの余ってるからやるよ」
別に風鈴が無くったって世の中生きていける。
「いらない」
即答。

千草はばっと両手を伸ばす。
「知ってる？風鈴って一個一個音が違うんだよ！」
すごいでしょ？と得意げに言う。
「そりゃちょっとぐらい違うだろ」
「そう！世の中にはたくさんの風鈴があるの！私だけの風鈴を探しに行くの！」
ばたばたと手を動かし、真剣に言う。
風鈴一個でそこまで興奮するだろうか普通。
「どこにー？」
この辺で風鈴を取り扱っている店を考える。
なんだかんだで結局は行くはめになるのだ。
そういえば、確かあそこの店先に並んでたなぁとゆっくりと考える。
「風鈴屋さん」
「その風鈴屋さんはどこにあるんだ？」
優は意地悪く聞き返してみると、さっきまでばたばたしていた手が

ぴたっと止まる。
そして少し考え、結果が出た。
「無い！」
「無いのか……」
よし、終わった。

しかしそんなことで諦める千草ではない。
「でもきっとどこかあにある！」
「そうだなー。とりあえず朝飯食ってから考える」
頭をかきながらあくびをこらえる。
「うんっ！」
珍しい満面の笑みで一気に目が覚めた。

「えー学校のプールなんて行きたくないよぉ」
ぐずっている真緒に、母親が怒っている。
「早く行きなさい！」
「ちーちゃん明日もまた遊びにきてね」
行きたくないってそんな理由でか。
「うん。行ってらっしゃい」
千草は頭をなでてやりながら笑ってみせる。
「いってきまーす！」
いつもの笑顔に戻り、玄関から走って行った。

以前からだったが、千草の笑顔には不思議な力がある。
超能力とかではもちろんない。
けれどにっこりと微笑まれると、思わず虜になってしまう。
ただの美人ではない。
千草には何かしらの雰囲気がある。
それが何なのかはよくわからないが。

優がゆっくりとトーストを食べている前で、
母と千草が楽しそうに会話をしている。
　元々母は明るい性格で社交的だった。
きっと千草が母親にあわせて話しているのだろう。
所で最近、妹もだったが、母まで千草と仲良くしている。
　千草と家を出たのは太陽がかなり昇っている頃だった。
優はうろ覚えながら、風鈴を売っていた場所へ向かう。
もちろん風鈴専門店ではないので、あるかどうかはわからかった。
店の前で自転車を止めると、一斉に風鈴のカーテンが向かえてくれた。
すごいな、と優は思う。
千草はそれ以上に大喜びだった。

「すごい数だね」
「だな。俺もちょっと感動したー」
「この中から一つだけを探し出すのか。頑張らないとね！」
よしっと拳をにぎる千草。
ざっと見てみたが、小さなものから、
誰が買うんだというでかさのものまであった。
「でも良いやつは高いんだぞー」
「わかってるもん！」
そう言うと店の中へ入っていった。
老人から風鈴選びのコツをおそわり、外につるしてある風鈴の前まで
いく。

「どれも綺麗な音」

耳をすまし、目を閉じる。
そして千草は忙しそうに、次から次へと風鈴の音を聞いて回った。
ちょこまかと動く千草はおもちゃのようだった。

風鈴、かぁとため息をつく。
探せば家から3・4個ぐらい出てきそうだと思う。
基本的に、模様で家族の誰かがお土産などで買ってくるぐらいで、
音まで千草ほどこだわったことは今までなかった。

同じように見える風鈴も、一つ一つ音が違う。
まるで人間みたいだな、などと思う。
同じように見えてもどこかが違って、同じ音のものはなく、ガラスのようにもろい。
そんな事を考えていると、眠たくなってきた。

「これに決めた！」
そう言って千草が高々と一つの風鈴をかかげる。
金魚が描かれた、涼しげな模様だ。
音は聞かなくとも、千草が選んだものならハズレはそう無いだろう。

帰り道、千草はさっそく買ったばかりの風鈴を出す。
風でちりんちりんと鳴る。
「私こんなの初めて見たー」
「風鈴知らなかったのか？」
ちょっと驚いた。
「まあね。風、もっと吹け吹けー」
「随分と嬉しそうだな」
「こないだ優の家で見て、いいなーって」
知らなかった。

案外細かい所まで見てるんだなぁと思う。
「この音だけで涼しくなれるよ」
千草はうっとりとした声で風鈴の音を褒め称える。
「エコだな……」
「まあねー」

五日目・風鈴（後書き）

できるだけ毎日更新できるように頑張りますー。

六日目・かき氷

その日は珍しく、十時を回ったころに千草はやってきた。
最近どうにも六時半に目が覚める癖がついてきていた。
そのため、今日はこないのかもしれないと思っていた。
千草とて毎日暇では無いだろし。
しかしその手にはしっかりと買い物袋が握られている。

スーパーの袋の中に、五色ほどのかき氷のシロップが見えている。
またかとは思ったが、今日も理想の夏休みを破壊される。
「じゃーん！」
千草はそう言い、高々と袋をかかげる。
「うわ、体に悪そうな色だな」
パチパチと一応拍手をしてやる。
「でしょ？思わず何色も買っちゃった」
「こんなの使い切れないだろ」
でかいボトルに食紅満載の液体が入っている。
一本使い切るのでもけっこう大変なのだ。

家のルールで、使い終わってからでないと、新しいシロップは買わないことになっていた。
なのでしかたなく苺味ばかり食べたことを思い出す。
「いいの！今日の予定はかき氷です！」
あ、今日は楽だなと内心ほっとした。
かき氷なら家でのんびりとかき氷機でささーっと作ってしまえばおしまいだ。

今日は三時には開放されるな、と時計を見た。
「千草ちゃーん！用意出来たわよー！」
下から大きな声で母が叫ぶ。
「はぁーい！」
千草も大声で返す。
そしてそのまま部屋を出て、階段をとんとんと下りて行く。

「千草ちゃん、氷たくさん作っておいたからね」
「ほんとうにありがとうございます」
軽く頭を下げる千草。
完全に母のお気に入りになっている。
「いいのよ、これくらい。
今日はちょっと用事入っちゃって付き合えなくってごめんねえ。
優！ちゃんと教えてあげなさいよ！」
なんだこの扱いの差は。
「わかったからさっさと行って」
「じゃあお留守番お願いねー」
「はーい！」
可愛らしく千草が手を振って見送った。

くるっと振り向けば、いつもの千草だった。
「あっつい。クーラー」
人の家に来ておいていきなり命令ですか。そうですか。
優はしかたなくリビングのクーラーをつけた。少し低めに設定しておく。

テーブルの上にはかき氷機と、大きなガラスの器が二つ置いてあった。

冷凍庫をのぞくと、ぎっしりとかき氷用の氷が詰まっている。
「じゃあ、今日の予定をはじめます！」
「おう」

そういうわけで、何事もなくかき氷作りがスタートした。
かき氷機専用の氷結カップで氷は作られていたので、
かぽんと中に入れるだけですんだ。今日は運がいいなぁと優は思う。
が、そう上手くはいかなかった。

かき氷機は何故か手で押しながら回すタイプのものだった。
おかしい。電自動のがあるはずなのに。
色々と探し回ったが見つけられなかった。
しかたなく、氷を削り始めた。

まさかかき氷一個を作るのにこれほどの労力が必要だとは思ってもみなかった。
まだ三分の一も削っていないが、腕がだるくなってきた。
やる気も無くなってきた。
向かいのイスに座って楽しそうに見ている千草の視線が痛い。
休憩などしてないでさっさと！と思っているに違い無い。

優はその後も一生懸命氷を削り続けた。
一個目の氷が終わっても、まだ器には半分も無い。
二個目を入れ、勢い任せでぐるぐるとハンドルを回し続けた。

「こんなもんかな？」
「やっとか……」
「お疲れ様。先食べていいよ」
その優しさを疑う。いつもなら、喜んで先に自分で食べるのに……。
不気味だ。

しかし汗だくになって一生懸命けずった氷を食べたいと素直に思う。
千草はキッチンの方から声をかけてくる。
「どのシロップかける？」
「黄色いの」
「はーい」
良い返事。

「出来た」
「なんだこの色は」
数分後出された氷の山は、南国を思わせるカラーだった。
下に水色、全体は黄色で、てっぺんが赤い。
「グラデーションにしてみました」
はっきりと言い切る。
「お前グラデーションって言葉の意味理解してないだろ」
「それくらい知ってる。でもきれいでしょ？」
確かに色はピンクと黄色がきれいに混ざり合い美しい。
「見た目はきれいかもしれないが食べるのはいやだ」
「なんでー？」
「味がおかしいだろ。ひとつだけにしてくれ」
「つまんないのー。ま、食べて」
「え」
「これは優が頑張って作ったかき氷だから、優が食べないと」
鬼だ。
あんなに一生懸命削って出来上がったかき氷。
腕がだるくなりながらも、一生懸命頑張った。
確かに、頑張りはした。

仕方が無く、スプーンをかき氷の中へ突き刺す。

赤と黄色が混じっている。なんとも微妙な味だ。
一口でももういい。
しかし、大きな器に山のように盛られた氷。
完食するまで結構時間を要した。
その間暇な千草は、アイスクリームをのんびりと食べていた。

次に千草の分を作った。
もう腕が半分死んでいる。必死に氷を削る。
千草の分を作っても氷は山のように残っていた。
「あ、全部使っちゃってて」
「マジかよ」
「うん」
まだまだ残っている氷にうんざりとする。

それから二人は三杯つづ食べた。
優は頑なに断り、シロップは自分でかけた。
なんだかんだとやっているうちに全部の氷を使い切った。
やっと…とだるだるの腕を下におろす。

想像以上の肉体労働であった。
かき氷を甘く見すぎていたようだった。反省する。

「体冷えた」
ソファーでぐったりと倒れている千草。
優もさすがにきつかった。
「かき氷って、こんなに作るの大変なのものなのね……」
「そうだな」
今日はめずらしく大した意味も無い一日だったな、と優は思った。
が、腕は明日絶対に筋肉痛になっているだろう。
ため息が出る。

七日目・図書館

その日は珍しく、優から電話をかけた。
『なに？』
すぐに千草が電話に出る。いつもの声だ。
「今日図書館行くから悪いけどつきあえない」
昨夜宿題をしている時に一冊かりっぱなしだった本に気がついた。
返しに行くついでに、読み直したい本があったので明日は図書館に行こうと決めた。
そのため、早朝に千草に電話をかけた。
『ふーん。じゃあ私も行く』
「遊びじゃないんだぞ」
図書館で千草は何をするか想像できない。
静かにしていてくれればそれで問題は無いのだが。
『それくらいわかってるわよ』
ちょっとすねた風に言う。
優はため息をつく。

玄関ホールの大きな空間は開放感がある。
光もよく入ってきて明るい。
「図書館ってもっと地味だと思ってたけどきれいね」
千草も感心して見上げている。
しばらくそこで立ち止まり
千草が目的を思い出すのを待った。

優は館内入り口で、延滞してた本を謝り返した。
「図書館ってすごいのね。本屋さんよりもいっぱい本がある」
少し驚いた風に千草が言う。大げさだなと笑いそうになる。
「まあ税金ですけどね」
「全部読んだらどれくらい時間かかるかしら」
素朴な疑問。いったいこの空間に何百何千冊あるのだろうか。
それさえもわからない。
「そんなこと考えなくっていい」
そう言い本の森へ入って行った。

どこか開いてる机が無いか探すが、この季節はなかなか難しい。
本なんて読みもせず、ただ涼みに来ているだけの者もいる。
勉強をしたいこっちとしては少し迷惑だ。

運良く開いている席を見つける。
奥の方で、回りの利用者は年齢層が高い。
騒いだら即行で怒られそうだなぁ。と優は思う。
仕方なくかばんを置いて本をとりに行く。

「絶対静かにしてろよ」
「わかってるわよそれくらい」
千草はぷいっとよそを向く。
「俺は読みたい本があるけど、お前は？」
「なんか面白そうなの適当に読んでおく。
だから静かにしてる。そんな心配しなくても」

ああ、今日は機嫌が悪いと優は頭が痛くなる。
何が気に入らないのだろうか？

やはり千草なりに今日の予定を立てていたのだろう。
それをこちら側から崩す形になってしまったのが気に入らないのではないだろうか。

しかし、それに一々付き合っているわけにはいかない。
千草はお姫様でも神でもなんでもない。
ただの女子高生だ。
少しばかりスペックは高いが。
後でとばっちりを喰らうので勘弁して欲しいものだ。
その後分かれ、それぞれ読みたい本を探し読み始めた。

静かに本を読む千草。
しかし優は唖然とした。
スピードが早いのだ。
ぱらぱらぱらとページをめくり続ける。
本当に読んでいるのか疑問だが。
聞きたいが、静まり返ったこの図書館内でははなしづらい。
立ち上がってはまた大量の本を持ってき、
ぱらぱらとめくって行く。
まさかの速読ってやつか？と思うが、あれとはまた少し違うようだった。
千草はかなり集中し、次から次へと本を、ページをめくりつづけた。

「さて、そろそろ帰るか」
そう優が口に出したのは、日も暮れて回りの席に人が少なくなってからだった。
帰ってきた言葉はそっけない。
「まだ途中」
「借りればいいじゃないか」

と、言うと、手を止めずに千草が言う。
「この本、持ち出し禁止なんだもん」
確かに背表紙の上に持ち出し禁止のシールが貼ってある。
なんだか知らないがやたらでかくて分厚い本だった。
「いいよ。優は先帰ればいいじゃん。私残る」

明らかに不機嫌。
なんとなく、優は気分が晴れない。
別に千草とここで別れても問題ないが、なんとなく気になる。
しかたがないな、と持ちかけていたかばんを置き、
千草の周りに出来た何本もの、本の塔をながめる。
どれも優の趣味には合わないものばかりだった。
「読んだ本はちゃんと戻せよー」
「あとでー」
それもまた、本をめくりながら適当に答えられる。

優は塔から五冊ほどかかえる。
「その本読み終わったら帰るぞ」
「うん」
優は何度も図書館の中をめぐり歩き
千草が探し出してきた本を片付けて回った。
なんで自分がこんなことを……と思うが、機嫌の悪い千草は好きではない。
そういえば、今日の予定は一体なんだったのだろうか。
気になる。
千草はいつも何かしらの予定を決めて朝っぱらから進入してくる。
今日は別だった。
怒ったかな？と思うが、そんなことで一々怒る人の相手などしていられない。
ため息。

「優ー終わったー」
パンっと本を閉じ、にこっと千草が笑ったのには驚いた。
絶対機嫌悪いと思っていたのに…と。
二人は帰る用意をして、最後の一冊を片付けた。

「ほんとはさー」
「ん？」
「ほんとは図書館って行ってみたかったんだよねー」
清々しい笑顔に思わずドキッとしてしまう。
「でもなんか機嫌悪かったじゃんか」
「本は集中して読まないと頭ん中入らないから」
「そういう問題なのか？怒ってたりしないの」
「しないよ。最後本片付けてくれてありがとね」
「別にそれくらいなんでもねーよ」
思わず優の方がそっぽを向いて答えた。

八日目・捨て猫

どたばたという大きな足音で目がさめる。
優は何事かと思い起き上がって下の様子をうかがう。
「どうして拾ってきたの！」
母の怒った声が響く。
「だってぇー……」
こっちは真緒の声だ。
「うちじゃ飼えないって前にも言ったでしょうが」
「だってみんな無視するんだよ！かわいそうだよ」
「だめなものはだめ！」
「朝っぱらからどーしたんだよ？」

階段を下りて行くと、真緒は猫を抱いていた。
またか、と思う。
「真緒が猫を拾ってきたの」

ため息混じりで母が困った顔をする。
うちでは動物は飼わないと決まっていた。
面倒を見るのがどうせ母になるからだ。
「まじでかよー。まーおー」
「お兄ちゃんまで反対なの？」
純粋な目で見上げられると、見方してしまいたくなる。
「んー……しかしなぁ」

そこに運が良いのか悪いのか千草がやってきた。
「おはよう！今日は」

予定を言う前にさえぎる。
「すまん、今ちょっととりこみ中でな」
「あー！ちーちゃんー！」
真緒は猫をだいたまま千草にかけよる
「真緒ちゃんおはよう」
「ちーちゃん見て見てっ」
そう言い、猫をぶらーんと伸ばす。
「猫かー。おいでー」

千草はそっと手を出し、猫を真緒から受け取る。
そっとお尻と尻尾を下にし、肩にしがみつくように抱く。
頬をよせると、丁度猫と顔が合う。
「あら、可愛い子ね」
千草は目をとじて撫でながら優しく言う。
「でしょー？」
「でもうちじゃ飼いませんよ」
母の厳しい声。

猫は随分と千草が気に入ったようで、ずっと抱かれたまま大人しくしていた。
「お前さん暖かいねえ、顔も美人さんだし毛並みも良い」
そう褒め称えながら愛おしそうに頬をするよせる。
「じゃあ誰か飼ってくれる人探さないとだめですね」
そう言うと、母は慌てて言う。
「そんな、千草ちゃんはいいのよ」
「ここで出あったのも何かの縁です。ね」

そう言って猫の首をかいてやる。
リラックスした猫は、半分寝ているようだった。

「やだ！飼う！」
しかし真緒は諦めない。
千草は少しかがみ、真緒の視線に合わせる。
「真緒ちゃん、真緒ちゃんはこの子が死んだらどうする？」
「死なない！」
叫ぶように言った。
「生き物はみんな死んでしまうの。それに、真緒ちゃんは学校があるから世話出きないだろうし」

千草は猫を撫でながらゆっくりと話す。
真緒はしゅんとなる。
確かに学校に猫はつれていけない。
だからと言って、家に放置するわけにもいかない。

母は横でうなづきながら
「そうよそうそう」
と言う。

胸ポケットからワインレッドの薄型携帯電話を取り出す。
その携帯を軽くふって真緒に笑ってみせる。
「知り合いに誰か飼ってくれる人いないか聞いてみるね」
「……うん」
「優、この子お願い。あ、猫の抱き方知ってる？」

優は千草から猫を受け取る。
思ってた以上に軽く、毛はふわふわとしていて愛らしい顔をしていた。
真緒が拾ってきてしまったのもわからないでもない。
「千草と同じように抱けばいいんだろ？」

「そう。ちゃんと見ててね」
「はいよ」
そう言うと、千草は優の電話をかけ始めた。

真緒が猫を抱きたいと言うので、優は一生懸命教え、
自分の部屋へ戻った。
ちょうど千草が電話している所だった。

「うん。そう。野良じゃないと思う、人に懐いてたし。
そっかーわかった。ごめんね急に電話しちゃって。ううん、またね」

「もしもし？元気にしてる？最近ほんと暑いよねー。
うん。だよねー。ところでちょっと聞きたいことがあってさー」

千草は電話をかけつづけた。
やはりすぐに引き取り手を見つけることは難しいようだった。
もう二時間近く電話でやりとりをしている。
そもそも、どんだけ知り合い多いのか不思議になってくる。
「そっかー。いや気にしないで、大丈夫だから。じゃあまたねー」
はーと千草は大きなため息をつく。
「見つからないかー」
「難しい」
ごろんと優のベッドに横になる。
「でも捨てるわけには行かないよなー」
「それは当たり前じゃないのあー、誰か飼ってくれる人いないかなぁ」
その時、千草の携帯が鳴る。
「はーい」
答えながら立ち上がる。
「え、ほんと？うん、うん。わざわざありがとうねー。

この埋め合わせ今度絶対するから。うん。ほんとありがとう。またね」
そう言うと、急いで電話番号をプッシュする。
「千草です。電話で聞いたけどほんと？うん。うん。
じゃああそこの公園で待ってる。はーい。ありがとう、助かったわ」
千草はパチンと携帯を閉じポケットに収めると、ブイサインで誇らしげに胸をはる。
「引き取ってくれる人決まった」

「ありがと」
千草は優に抱かれている猫の額を撫でる。
「別に。私はこの猫に幸せに死んで欲しいだけ」
「とんだな」
話の内容がガラっと代わったが、千草は気にせず続ける。

「生きている間も大事だけど、死ぬときにその場に誰か一人でもいてあげて欲しいのよ。
生まれた時も死ぬ時も、一人じゃ寂しいだろうから」

千草は少し寂しそうな顔をしながら、猫を撫で続けた。
「そろそろ行こうか」
猫を抱いて電話で決めた公園へと歩いていく。
真緒は泣いてぐずったが、母に怒られてしょげていた。
基本、聞き分けが良い子なのだが、よっぽどあの猫が気に入っていたらしい。

公園につくと、噴水の前で赤いフレームのめがねをかけた女性が手を振っていた。

千草も振り返した。

猫は若い女性に引き取られて行った。

千草は、大切にして欲しい、とだ告げ渡した。

「よかったな」

「うん」

八日目・捨て猫（後書き）

感想よろしければお願いします。

九日目・花火

『おっはよー！』

元気な声が頭に響く。

千草の今日の予定はわかっていた。

今日は花火大会の日である。

近いので、毎年家から見ている。

「今日は花火だろ？」

先に言い当てると嬉しそうな声で返って来る。

『そう！』

「うちのベランダから見えるから」

『そんなのじゃなくって、下まで行く』

「嫌だ」

優は即答した。

花火大会の会場は毎年大混雑する。

露店も並び、人も多い。
一旦迷子になれば、見つけることが難しい程だ。
何を好き好んで混雑してる所で花火を見なければならいのだ。
『レジャーシートは持って行くから』
そう言って電話を切った。

千草が来たのは二時ごろだった。
「こんにちはー」
「千草ちゃんいらっしゃい。上がって上がって」
明るい声で母が迎えるが、千草は申し訳なさそうな顔をして首を傾ける。
「いえ、今日は優君と花火を見に行く約束をしましたので」
たたたと真緒が走って玄関にやってくる。
「いいなー！ちーちゃん、わたしもー！」
がしっと真緒の頭を鷲づかみする優。
「真緒は迷子になるからダメだ」

「ならないよー！」

「真緒！千草ちゃんが困ってるでしょうが」

「真緒も見に行くのー！」

「家から見えるでしょ！」

「でもー……」

母とぐずっている真緒を置いて出る。

どうせベランダから見える。

優は水筒とおやつの入ったかばんを持つ。

すたすたと前を歩く千草に声をかける

「本気かー？すっげー人多いぞ？」

「前の方で見たいの」

前の方か……打ち上げまでだいぶ時間があるが

場所取り合戦はすでに始まっているだろう。

急がねば、と思わず優まで早歩きになった。

「あ、始まった」

ドーンと音が響く。

夜空に大輪の花が咲く。

次々と打ち上げられていく。

様々な色や形が浮かんでは消えていく。

優と千草は寝転びながら天を仰ぐ。

なんとか良いスペースをとれたおかげで

のんびりと見ることが出来た。

仰向けになりながら、千草が手を上にあげる。

「掴めそう」

手を、ぎゅっとしめる。

「なんてね」

と、半分笑いながら言う。

得に話すことも思い浮かばなかった。
なので二人とも黙ったまま花火に彩られた夜空をながめていた。

こういう関係も、良いな、と優は少しおもった。
振り回されるのは迷惑だが、楽しいこともある。
こうやって無言でも気まずい空気にならない。
別に友達では無いので気を使う必要も無い。
友達じゃなかったら一体千草とどういう関係なのか。
考えたが思い浮かばなかった。
友人？だろうか。

また大きな花火が上がる
「やっぱり近いと迫力が違うねー」
千草の言葉は嬉しそうだった。
「おう、俺もちょっと舐めてたー」

来年の夏休みは、どうなるんだろうな、なんて思った。

九日目・花火（後書き）

ためしに、文字の間に、一列空行を入れてみました。
こちらの方が、やはり読みやすいのかな？
ちょっと詰め詰めな感じがしていたのかもしれないと思い
変更してみました。
読みやすくなったか、どうかよくわかりませんが
よろしければご意見頂けると嬉しいです。

十日目・カレー

『おはよー』
「おはよう」
もはやこの朝の電話は日常化しだしていた。
今日の予定は何だろうか。暑い。
『十一時半に駅前ね』
遅いな、と思う。
何か理由でもあるのだろうか。
「で、何するんだ？」
優は聞いてみた。
『今日はカレーを食べに行きます！』
カレーか、胃が痛くなる。
『じゃあね』
ぷつんと電話が一方的に切られる。
「十一時半か……」
時計はまだ七時を少し回ったくらいだ。
することも無いので夏休みの宿題をしようと思うが
カレーがどうにもひっかかってしまう。

帰ってきてからやればいいか、と思いシャープペンシルを置く。
朝食をとるためにリビングへ下りた。

そろそろ時間だな、と腕時計を見て用意を始める。
用意と言ってもたいしたものではないが。
洗濯物を干し終え下りてきた母に丁度でくわす。
「今日昼飯いらない」

そう言いながら靴をはいた。
「何かたべてくるの？」
問いかけられるが、説明する気にもなれなかった。
「おー。ちょっと言ってくる」
親不孝でごめんなさい。この穴埋めはいつかします。
そう心で呟きながら、玄関からとびだした。
「優！」
大きな声で呼ばれるが、止まらない。
勢い良く自転車をこぎはじめた。

「時間通り」
時計を見ながら千草が言う。
「遅れたら怒るだろ」
「当たり前じゃない」
千草の中では当たり前なのか……。
やはり少し常識がずれているとしか考えられない。
「で、カレーは？」
たずねてみると、
「ついてきて」
と言い、歩き出した。

結構歩いた。
細い路地を何回か通り、住宅街の中にぽつんと黄色い家があった。
まさか、とは思ったがやはり的中してしまう。
《いんどのかれい》
微妙な店名だなぁと思う。なぜひらがな？
千草はさっそく中へ入る。
「いらっちゃいませー」

日本語間違えてる。
と思ったが訂正するのもあれなので黙っていた。
まあ通じているから大丈夫だろう。うん。と優は黙った。

「今日の予定は辛いカレーです」
席に座ってから、今日の予定を宣言される。
まあ大体わかってはいたが。
「からいのか……」
優はレトルトのカレーなら辛口が好きである。
少しぐらい辛くてもなんとかなる。
「本場仕込のカレーだそうです」
そう言い、メニューを見ていると、

「ランチセット二つねー」
ふっと店員が現れる。
気配に気がつかなかったので驚いた。
しかも勝手にメニューを決められる。
止めるのも面倒なのでそれでいいやと決める。
何が出てくるのか想像もつかない。

店は結構繁盛しているようだった。
お昼時ということもあるが、開いてる席は少ない。
店内の装飾は実にインドらしい。
「どぞー」
急にぬっと店員さんが現れ驚く。
両手に持っていたプレートを机の上に置く。
「おいしいよー」
と言い、去っていく。
謎な店だな、と優は思った。。

プレートに目を向けると、少し驚いた。
「なんかスゲーな」
「随分と本格的ね」
千草も満足そうに言う。
皿には四種類のカレーとナンとラッシー。
豪華だ。

お腹が空いていた優はさっそく食べる事にする。
「いただきます」
一口食べてみる。
「おいし……っ！」
むせた。ゲホゲホと。
しばらく戻らない。
涙目になって、カレーを見つめる。
「からい……」

「からいの苦手？」
そう言った千草はぱくぱくとカレーを食べている。
あの辛いカレーも平気な顔で。
普通の人ならば辛くて耐えられないだろう。
もちろん優も口の中・食道・胃がひりひりとする。
「お前よくそんな食べれるなぁ」
「そんなに辛くない。大げさね」
涼しい顔してナンをちぎる。
「マジでからいぞ？！なんで平気なんだ」
「そもそもカレーってこういうものじゃない」
当たり前のように千草が言う。
「そうだけど……」
まあそうだよな、と納得する。
しかし辛くて中々食べられない。

「ごちそうさまでした」
先に千草が食べ終わる。
全部綺麗に食べつくしている。
それに比べ、優のプレートはいまだにカレーが残っている。
「俺まだまだ残ってる……」
半分リタイアした気持ちで言うが、ばっさりと切られる。
「食べ終わるの待ってるよ」
ラッシーを飲みながら笑顔で千草が言う。
うんざりしながら、また辛いカレーを口に入れる。
じたばたして水を飲んでまたじたばたして。
「からい！」

向かいで頬杖をついている千草はご機嫌なようだった。
そんなにカレーが美味しかったのだろうか。
「うん、やっぱ反応良いなぁ」
「？」
「辛いカレーを泣きながら食べてるのを見たかったの」
にこっと笑う。
千草はドエスだな、と涙をぬぐいながら思った。
悔しさで、残りのカレーをかきこんだ。
おもいっきりむせた。
家に帰ってもしばらくは動けなかった。

十日目・カレー（後書き）

感想などよろしければいつでもお待ちしておりますー。

お菓子祭り

夜に千草から電話がかかってきた。
家にいろ、という内容だった。
いつもじゃないかと思うが、優は黙っておく。

その日はガサガサと音を立てながら階段を上がってきた
そしてドアの前で止まる。
いつもなら遠慮なくは入ってくるのになんだろうと座って不思議に思う。
「あけてー！」
どうやら両手が塞がっているようだった。
しかたなく、優は自分の部屋のドアを開ける。
するとスーパーのレジ袋に顔面をおもいっきり殴られた。
「いってー」
優は思わず後ろへ引き下がった。

「じゃーん」
いつもの明るい声。千草はご機嫌なようだった。
千草は機嫌の悪い時は恐ろしい程悪いので
なるべくそういった時は関わりたくは無い。

そして優の顔面を襲った袋には、大量のお菓子が入っていた。
袋は全部で三つ、ぎゅうぎゅうに詰められている。
「多いな……」
「うんっ」

「で？」
これは何のつもりだ？と無言で聞くと、すっと右手を掲げ
「今日はお菓子祭りを開催します」
と、宣誓した。

「お菓子祭り？」
優は思わず聞き返す。
「たくさんのお菓子をあけて、食べるの」
「知らないな」
千草はぺたんと座り、袋から次々とお菓子を出し並べ始めた。
その量ははんぱなく、広くはない優の部屋の床はお菓子だらけになる。

「じゃあいくよ！」
千草はそう言って一つめのチョコレート菓子をあけた。
次にスナック菓子をあけ、
その次にクッキーをかけていく。
どんどんと開封されていくお菓子たち。

「さー食べよう」
部屋にはてんこ盛りのお菓子たちでいっぱいだ。
後で片付けることを考えるとうんざりしてくる。
「まずはー」
などと言いながら、色々考えているようだった。
そもそもこの二人で食べきれるのはどう考えても不可能だ。

しばらくお菓子を食べていたが、
まあ普通に考えてお腹が一杯になるのは時間の問題だった。
しかしお菓子はまだまだそこらじゅうにある。

優はそれらを見るだけで食欲が失せてくる。

「そもそもなんでこんな祭りを俺の部屋で開催しようとしたんだ」
「別にぃー」
と、チョコレートを口に放り込む。
怪しい。何かある、と優は考える。
何か特別なことでもあっただろうか？
今日は来るのが少し遅かったことと、やたらと機嫌が良いのがひっかかった。

「もう食えない」
優がリタイア宣言をすると、千草は不満そうな顔をする。
「頑張って！お祝いなんだから！」
「お祝い？」
何のだ？
「あ、え、あーえっとその……これの」
言葉につまりながら、人差し指を上げる。
何のことだか最初はわからなかったが、はっと気がついた。

先日、千草により負傷した人差し指が完治した。
朝の内に病院に行き、もう一回レントゲンを撮った結果
もう大丈夫だということだった。
大変な目にあったが、なんとか早く治って良かったと帰宅した。

まさか千草が覚えていたとは思っていなかったのでとても驚く。
そのために、お菓子をこんなにも買い込んで押しかけてきたのかと思うと
少しだけ嬉しくなってしまう。
しかし原因を作った張本人でもあるので複雑な気分になる。

でも、まあ、覚えていてくれたことは素直に嬉しかった。

なんと答えようかと優は迷うが、上手い言葉が見つからない。

「おかげさまでなんとか治りました」

棒読みで言うと、千草が膨れ上がる。

「よかったね！でも謝らないからね！」

そう言って、スナック菓子を口いっぱいに頬ばって睨まれる。

しかしまるでリスみたいで、可愛かった。

チェス

そろそろかな、と優はベッドで寝返りをした。
目を閉じていると、チャイムの音と母親と妹と千草の声。
階段を上ってくる足音。
いつもと同じだ。

元気よく、ドアはバンッと開かれる。
いつか壊れるのはではいかと心配になりそうだ。
「ゲームしよ」
ゆっくりと起きて頭をかく。
「へー、千草ゲームとかするんだ」
千草はあまりゲームとかそういいったものには
興味が無いものだとばかり思っていた。
以外な一面に少し驚く。
「持ってきた」
下へおりながらたずねる。
「ところで何のゲーム？」
「チェス」
チェス？
あのキングとかなんとかいうやつを動かして遊ぶ外国のゲーム？
優はもちろん、
「チェスなんてルール知らん」
「何言ってるの。チェスのルールぐらい誰でも知ってるでしょうが」
と、普通に返される。いや、誰でもは間違ってるだろと思う。
「千草の常識を基準にするな」

「本当に知らないの？」
「知らない」
きっぱりと言い切る。
「せっかく持ってきたのに」
少し残念がる千草には申し訳ないが
囲碁や将棋は年寄りが知ってるかもしれないが
このチェスというゲームはぽかーん状態になるだろう。

フローリングを走ってくる音、真緒だろう。
「ちーちゃんおはよー！」
「おはよう真緒ちゃん」
にこっと微笑む姿だけは美少女だ。
中身はとんでもないが暴走娘。
「今日チェスするの？」
千草はわざとちょっと困った顔で言う。
「予定ではね、でもお兄ちゃんルール知らないんだって」
「じゃあかわりに真緒がやる！」
真緒がはーいと手を上げた。
「お前出来るのかー？」
「パソコンに入ってるから知ってるよぉ」
そういえばそんなのも入ってたな、と思い出す。
まさか妹がチェスをしていたとは。
少し驚いた。

「で、どうなんだ」

始まって一時間たったが、ほとんど進んでいないようだった。

「「黙ってて」」

二人は黙り込んだままだ。
じっと次の手を考えている。
真緒がコマを動かすとしばらく千草は悩み
千草がコマを動かすとしばらく真緒は悩んでいた。
先ほどからずっとこの調子で、ジュースにも手をつけない。
真剣な顔で、ゲームを進めて行く。

段々と長考が増えてき、優は眠たくなってくる。
まさか真緒がチェスやるなんてほんとびっくりした。
それも千草とやりあっている。
その横顔は、優の知っている妹ではなく、
今まで見たことのない真剣な顔でゲームを進めている。

「チェック」
沈黙を破ったのは真緒の方だった。
「真緒ちゃんやるなぁ」
千草が相手を賞賛するのは珍しい。
しかし千草の声には余裕がある。
一体どうなっているのか、優にはさっぱりである。
「真緒の勝ち？」
と、たずねると
「チェックかけられただけ」
と言いながら、コマを動かす。
「ちーちゃんどーするー？」
千草は真緒に話しかける。
ゆっくりとした手つきでコマを動かす。
「これはおとりっ！」
そう言い、真緒は即座にコマを動かした。

「チェック」
すばやく告げる。
真緒の手がコマから離れた瞬間だった。

「あ、あ！あああっ！」
慌てて立ち上がり、愕然としている。
「どうする真緒ちゃん」
いたずらそうに言う千草。
これは明らかに千草が有利になったのだろう。
しばらく真緒はコマたちを見、一生懸命考えて考えて考え抜いて、
「負けましたぁ」
べたーっと土下座する。

「何がどーなったんだ？真緒が勝ってたんじゃなかったのか？」
千草は涼しい顔をして言う。
「真緒ちゃんは私の罠にはまってしまいました」
パチパチと真緒から拍手が送られる。
「すごい…もう一つも動かせない……」
「気づかれないように、結構コマ失っちゃったな」
「さすがちーちゃん……」
「でも真緒ちゃんも強かったよ」
「いや、今見ると完全にちーちゃんの計算どおりに全部進んでたー」
がっくりと肩を落とす。
「またやりましょう」
「うん！」

あれ？と優は思う。
「今日はもう終わりかー？」
「そう」
「つーかーれーたぁーのぉー」

「私も」
二人から冷たい目で見られる。
別に悪い事を言ったわけでもないのに。何故…。
「はぁー」
深いため息。
「チェスってすごい頭使うの。二回連続本気でなんてキツイ」
「そういうものなのか」
「そーなの！お兄ちゃんにはわかんないだろうけどねー」
優はなんだか仲間はずれにされた気分になった。
「……俺もルール覚えよ」

魚釣り

「おはよ」
「おはよう」
二人は駅前で朝早くに待ち合わせをしていた。
今日の予定は魚つりだった。

お互いまだ眠たく、少し頭がぼーっとしていた。
珍しいな、と居眠りをしかけている千草を見て思う。

魚を釣りたいと言い出したのはやはり千草だった。
優はそれならば、以前行ったことのある、自然に近い状態の釣堀が良いと言った。
千草もそういうのがいいと言ったので決定した。
電車にゆられ、魚のつりぼりまで行く。

つくと山の中だった。
少し歩く。
すると釣堀の看板が見えてくる。
「すずしいなあ」
後ろで千草が言う。
山は木々で覆われ日陰になり、風が良くと通る。
「ここで釣るの？」
「そう。簡単だ。エサつけるのはやってやるから」
釣堀の管理所で竿とエサをもらってくる。
さすがに千草でもエサつけはキツイだとうろ配慮して言うと
別にどうでもいいという顔をしながら御礼を言われた。以外だった。

ぐんっと竿が引っ張られる。
「お、きたきた！」
優が吊り上げた魚は岩の上でぴちぴちと跳ねている。
「いいな」
離れた場所で座っている千草が言う。
丁寧に針を外しながら答える。
「そのうち千草も当たるだろ」
優はそう言い、またエサをつけてさおをふる。

順調に次々と釣っていく優に対していまだ一匹もつれない千草
「つまらない」
沈んだ声。千草は未だに一匹も当たらない。
「……場所代えるか？」
「いやよ」
気を使ってみるが、裏目に出る。
千草は頑固にその場を動こうとはしなかった
その後も魚は釣れ続け、ビクでは何匹も泳いでいる。

お昼前になると、他の釣り人も増えてきた。
優はそろそろ引き上げようかと言いたい所だったが
座り込んで竿を睨んでいる千草を見ると、言い出せない。
しばらくそうしていると、
「あきた」
と、千草は言い、靴と靴下を脱ぎ、岩に腰掛けて水に足をつけた。
完全に釣りを諦めたようだった。
まあ一匹も釣れなかったらしょうがない。
しかしそう上流でばしゃばしゃされるとこっちも釣れない。
優は潮時だと感じ、帰る準備を始めようとした時、
放ったらかされたままの竿がずるずると引いているのが目に入る。

「千草！ひいてるぞ！」
思わずそう叫ぶと、千草は驚きながら、慌てて竿を掴む。
「えっ、ど、どうすれば」
動転している千草の元へかけより、竿を一緒に引く。
「重っ！なんだよこれ」
かなりの手ごたえがある。今まで釣ったものよりも、ずっとでかい。
「手放すなよ！」
「わかってる！」
そう言いくるっと千草が振り返った瞬間、ずるっと足がすべる。
二人は強い力にひっぱられ、川へとダイブしてしまった。

「優！携帯ずっと鳴ってるわよ！」
母親の大声で目が覚めた。
今日は朝早くから遊んでいたため体がくたくただった。
手を動かして携帯に出る。
「はい」
「優？」
千草の声だ。
ため息が出る。
「なんだよ千草か」
「酷い言い方」
「眠くないか？」
そうたずねるが、向こうはそうでもなさそうだった。
「あんまり。ところで明日そっち行けそうにない」
「今日いっぱい楽しんだしなー」
一日くらい休んだっていいだろう。
たまにはゆっくりと夏休みを満喫するのも悪く無い。
「うん、そろそろ宿題もしなきゃいけないしね」

そういえば、千草は同じ学校ではあるが、特別進学コースだと言っていた。
宿題の量は普通科の優の何倍もあるだろう。
そもそも夏休みなどあるのだろうか？
もしかして授業をさぼって毎日遊びに来ているのではないだろかと思う。
それでも黙っておく。
「わかった。じゃあ明後日に」
優の方から、次の約束を作る。
「うん」
そう言うと、電話はぷつんと切れた。
少し様子がおかしかったが、疲れでも出たのだろうと思う。
実際、優も家に帰ってきてダウンしてしまった。
千草の声を思い出す。
びしょ濡れになって、二人で笑った。
笑顔が、なんとなく印象的だったな、とベッドで寝返りをうった。

＞i1110951－13977＜

魚釣り（後書き）

ここで一旦一区切りです。

夏休みに全部書きたかったのに書けなくて悔しいです…。

お祭り

その日は千草がこないということがわかっていたので
早くに起き朝食を父と並んで食べ
残っている宿題を進めていた。
大体は終わらせているので、甲子園を見ながらのんびりとやっていた。
昨晩に、少し風邪気味だから行けないと電話がかかってきた。
昼食ものんびりと食べ、テレビの前でぼーっとしながらまた甲子園を見た。

一年後、二年後、自分は彼らと同じように青春を過ごすのだろうか。
ブラウン管越しの彼らは、自分と同じ高校生には見えなかった。
まるで映画の登場人物のようで。
自分とは次元が違うように感じる。
きらきらと輝く何かが、あるような気がした。

ふと千草の笑顔を思い出す。
それはとても綺麗に輝く何かのようで、特別なものだった。
千草は滅多に笑わない。実際に笑っている所を見たのは、数える程度だ。
いつも無表情で何を考えているか予測できない。
不敵な笑みや機嫌をそこねたふくれ面、冷たい視線、明らかにバカにした仕草。
思い返せば、無表情ばかりではないなと思いなおす。

なんとなく会いたくなる。

ここの所、毎日のように顔を合わせていた。
海辺に行ったりスイカを食べたり動物園に行ったり映画を見に行ったりした。
夏休みをほぼ一緒に過ごしている。
たった一日会えないというだけで、ここまで寂しく思うものなのだろうか。

無性に千草に会いたくなる。
会えなくてもいいから、声が聞きたくなる。
携帯を手にし、千草の番号を表示するが、かけるか迷う。
少し迷った後に思い切ってかけてみた。
けれど繋がらなかった。電波が届かないか電源が入っていないそうで。
つまらないな、と思いながら携帯が手からするりと落ちていった。

翌日の昼に千草から電話がかかってきた。
それまでぼーっとしていた優は少し慌てる。
「お祭り！」
「言うと思った」
今日は近所で夏祭りがある。
千草なら絶対に行きたいと言うと推測していた。

夜六時。
近くの境内で優と千草は待ち合わせをした。
優は十分早くついたが、すでに千草がりんご飴を食べている所だっ

た。
今日は夏祭りで、たくさんの人でにぎわっている。
「遅い」
少し怒ったように千草が言う。
約束の時間までまだ時間がある。
しかし優には反論する気は起きなかった。

手にしているりんご飴が憎たらしく感じる。
「なんだよ、先回ったのか」
てっきり一緒に回ると思っていたので、少し悲しくなる。
楽しみにしていただけに残念だ。
いろんな出店を回って、たくさん遊ぶのだとてっきり思っていた。
「一番手前の出店で売ってた」
さらっと言う千種。
「俺もりんご飴食いたかったのに」
八つ当たり気味に言う。
別にりんご飴大好きというわけでは無いが。
「いる？」
半分冗談な顔をして千草が食べかけのりんご飴を差し出す。
「いらない」

時間が経つにつれ、人も増えてくる。

「それにしても、すごい人ごみだね」
「年に一度の祭りだからなー」
「じゃあそろそろ帰ろうか」
「はぃ？お前何しに来たんだ」
「夏っぽさを感じるために」
千草は胸をはって、さも当たり前のごとく言い切る。
まあ端っこ方で他で見ていても、行き交う人々の賑わいを見ている

だけでお祭り気分にはなれる。

千草はりんご飴を食べ終え、観察するように目を凝らしている。
何が楽しいのか優にはよくわからない。

そもそも、あまり千草のことを知らない。
いつも優の家にやってきて、母と妹を味方につけている。
平気に部屋に押し入ってきて、酷い時は起きるまで蚊の羽音のマネをする。
大迷惑なやつだ。

それでもなぜだか許してしまうのはどうしてだろうか。
断ればそれで済むだけなのだが、言いづらい。
最初の頃はうるさいヤツだな、と思っていたが、今はただ話していて楽しい。
来年も再来年も、こんな風に過ごしたいと思えた。

ひまわり畑

「夏だし、ひまわり見に行きたいな」
それはつまり、連れて行け、と言っているのと同じことだ。
どこまでお姫様なんだとため息が出る。
「電車とバスで一時間くらいの所ならあるけど」
優はしかたなく、知っているひまわり畑があると言った。
「本当？！じゃあそこに行く！」
嬉しそうな声。

炎天下の中、ひまわりを見に行くのは
はっきり言ってだるいだけである。
けれどあの弾むような声を思い出すと、まあいいか、と思った。
夏休みももう残りわずかだった。

二人で電車に乗り、途中からバスに乗り換える。
段々と回りの景色が緑色に変わってくる。
千草は興味深そうに、流れ行く景色を飽きることなく見ていた。

しばらくすると、遠くに黄色い箇所が見えてくる。
「ひまわりだらけ！」
バスはひまわりのすぐ横を通っていく。
いったいどれだけの数があるかわからない程の広さだ。

次のバス停で下りて少し歩くと、目的地だ。
「ここのひまわり畑、小さい頃よくばーちゃんにつれてきてもらってたんだ」

なつかしいな、と思う。
祖母は亡くなってしまったが、思い出はたくさんある。

「私の背よりも高い」
そう言って千草ははしゃぐ。
太陽を浴びてすくすくと成長した、真っ直ぐなひまわりたち。
「ちょっと探検してくる」
すでにひまわり畑に入りながら千草が言う。
思わずあきれる。
「迷子になんなよ」
「小学生じゃあるまいし」
そう言い、ひまわりの中へ消えて行った。
ほんと子どもっぽいな、と思う。
普段は大人びた風に気取っているので、その二面性が見ていて楽しい。

水筒を取り出し、冷たいお茶を飲んで休憩をする。
さすがにこの年になって、ひまわり畑で遊びたいとは思わない。
千草も飽きたら戻ってくるだろう。

ずっとこのまま毎日が過ごせたらな、と思った。
確かに千草に振り回せれっぱなしで何かと酷い目にあったことがあるが
それでも怒れない自分がいた。

千草の笑顔はひまわりより明るい。
たまに見せる笑顔、無茶苦茶な性格、それでいてどこか純粋さがある。
一緒にいれば楽しい。

ただ、一緒にいてくれれば……。

傲慢だよな、とため息をつく。
電話の無い朝は寂しい。
いつも千草を待っていた。
ただ、待っていただけ。
それじゃあだめなんだ、と自分に言い聞かせる。

きっと自分は、千草が好きなのだと思う。
我がままでプライドが高くて気分屋で……。
そんな千草が、いつのまにか大切な人になっていた。
たった少し夏休みを共に過ごしただけだけれど、
段々と千草を思う気持ちが大きくなっていった。
会いたい、今すぐに会いたい……。
これは間違いなく、恋なのだろうと思った。

けれどこの気持を伝えたいとは思わなかった。
今の関係が崩れるのが、怖かった。

ため息をついて、もう一杯お茶を飲んだ。
それからはぼーっとひまわりと真っ青な空を見ていた。

しばらくすると、千草は戻ってきた。
腕時計を見ると結構時間がたっていたことに気がつく。
「どこ行ったかと思った」
「どこにも行かないよ」
さらっと言うと、少しだけ笑った。

夏が終わっても、どこにも行かないか？とは聞けなかった。

水族館

朝起きて、優に電話をかけようとした瞬間に
千草は、はっと気がつく。
発信履歴が優の名前ばかりになっていた。
少し嬉しくかんじた。

それと同時に、寂しく感じた。
夏が終われば、優との関係もほどけてしまう。
まるで魔法のように。

我がままばかり言って何度も困らせた。
散々バカにしたり、いろんな事に振り回していた。
あの夜偶然コンビニで出あっただけなのに。

いくらでも逃げれるのに。
鳥かごの入り口は開いたままだ。

段々とわからなくなっていく。
どうしてこんなに胸がざわつくのだろう。
会いたい、会いたい……

携帯を握り締めたまま、頭を整理する。
結論は簡単に出た。

これは、恋なのだと。

先日、近くの水族館の入場チケットをもらったので行こうと誘われてた。
その時は何も考えずにただ喜んだだけだった。
今日会っても普通に喋れるのだろうか。
いつものように振舞えるのだろうか。
不安で押しつぶされそうになった。

「おはよう」
「おはよ」
下を向いて返事する。
いつも言っていた言葉なのに、なんだか重たく感じる。
「体調でも悪いのか？」
すぐに見抜かれる。
「別に」
やっぱり挙動不審者になってしまう。
昨日、散々いつも通りに接することが出来るように
鏡の前で練習したが、実際に会うと全てすっとんでしまう。
半分パニック状態だ。

水族館は全然おもしろくなんて無かった。
あんなに楽しみにしていたのに。
ぺたっと水槽に手をあてると、ひんやりとしている。
「やっぱ今日の千草おかしい」
「気のせい」
そっぽを向いて先に歩いて行く。
やはりぎこちなくなってしまう。

イルカショーもまともに見れなかった。
歓声や拍手がおこっても、ぼーっとしてしまう。

いま、隣には好きな人が座っている。
こんな経験、今まで一度も無い。
どうすればいいのか、わからず、ただ無言で空中を見ていた。

ただ、隣に優がいてくれれば、それだけでいい気がした。
どこでも生きていける気がした。
ずっとずっと、側にいてくれるだけで、笑ってくれるだけで、いいのに。
なんて思ってしまう自分にあきれた。
どこまで自己中心的でわがままな性格なんだろうと。
泣きそうになる。

天体観測

携帯電話を片手に、優は迷っていた。
以前に約束していたのを思い出した。
今年の夏の終わり、流星群がやってくるのだ。
ニュースなどでもとりげられている。

ちらっとその話をすると千草は絶対に見に行きたいと言った。
やっぱり声かけた方がいいよな、と考える一方で
なんだか会いづらいなと思う。
どんな顔をして会えばいいのかわからない。
好きだと自覚してしまえば、もう引き返せない。
本当は会いたくてたまらなかった。
この夏休みを、終わらせたくなかった。

千草はすることも無くぼんやりと携帯をいじっていた。
明日はいよいよ流星群が一番近づく日である。
見に行こうと約束をした。
でも、そんな約束、忘れてるかな、と少し胸が痛む。
一緒に見たかった。
ただ、それだけ。
それ以上は望まない。
望んでも叶わないから。

急に携帯の画面が変わり、電話の着信音が鳴る。
何も考えずに慌ててでる。

「はいっ」
千草はしまった、とすぐに後悔する。
相手は優だった。
「流星群の話聞いた？」
「うん、聞いてる」
「どっかで見ないか」
「どっかってどこ」
頭の中がぐちゃぐちゃになる。
「山にあるキャンプ場。この夏最後のビックイベントらしいから、流れ星いっぱい見れるって」
「流れ星か」
「肉眼でもよく見えるらしいしさ」
「わかった。時間は？」
「五時に山の入り口に集合」
「じゃあまた後で」
「また後で」

電話を切って、深いため息をつく。
いつも通りに話せただろうか。
優の声はいたって普通だった。
少し癪にさわる。
こっちはこんなに悩んでいるのに、と。
それが一方的な悩みで優に何の落ち度も無いことはわかっていたが。
なんとなく気分が沈んでいく気がした。

優は時間をチェックし、家を出た。
山の入り口は思っていたよりも人が多かった。
この辺りで流星群を見るには、ここが一番見やすいポイントだ。
家族連れやカップルが次々と展望台へと流れていく。

しばらくしてから、千草がやってきた。
珍しく遅刻ギリギリだった。
少し久しぶりに会う千草に戸惑う。
「千草！」
平静をよそおって手を振る。
優に気がついた千草は小走りで近づいてくる。
「ごめん、遅くなった」
息をきらしながら千草が言う。
「まだ約束の時間内」
そう言い、展望台へと向けて山にのぼりはじめた。

「人多い」
展望台に到着した最初の一言がそれだった。
あまりの人の数に千草は驚いていた。
「そうだろうと思って持ってきました」
そう言い、優は少し大きなかばんを突き出す。
「なに？」
「レジャーシート」
母親から持っていくように言われたものだ。
おそらく人が多いので、寝転んで見れるようにと渡してくれた。
まさにその通りになった。
「賢いわ」
少し驚いたように千草。
「まーな」
優はふふーんと胸をはってみせる。

レジャーシートは大きくて、二人が寝転んでも十分だった。
芝生の上に敷いて上を向く。
満天の星空。

優はこんなにもこの街から星が見えるとは知らなかった。
暗闇に、いくつも輝く星々。
手を伸ばせば掴めそうだった。
そう、手を伸ばせば千草に届きそうだった。

「もうすぐ夏休み終わるのね」
夜空を見上げながら千草が静かに言う。
「早いもんだよなー。でも今年は色々やったな」
「うん」
目を閉じて夏休みを振り返る。
あのコンビニの夜を。
「セミとりしたね」
「パフェ食ったな」
「採掘に行った」
「カラオケも行った」
「風鈴選んだ」
「かき氷は微妙だった」
「図書館は涼しかった」
「捨て猫今頃幸せかな」
「花火きれいだったね」
「カレーは辛かった」
「シエスタはつい本気で寝ちゃった」
「甲子園は燃えたなー」
「キャッチボールはつまんなかった」
「お菓子祭りとかなー」
「映画はおもしろかった」
「動物園も楽しかった」
「チェスは覚えて」
「クッキーまずかった」
「魚釣り初めてした」

「デパ地下混んでたな」
「お祭り楽しかった」
「スイカおいしかった」
「ひまわり畑すてきだった」
「水族館また行きたいな」
「天体観測、次はいつかな」

そう言うと、二人とも黙り込む。
何を話せばいいのかわからない。
楽しかった夏休みが終わる。
また学校が始まるのかと思うと気分が沈む。
別に学校が嫌いなわけではない。
ただ、あまりにも夏休みが充実しすぎた。
千草といて、楽しかった。

「優、大事な話がある」
がばっと千草が起き上がる。
「なに」
のんびりと空を見上げる。
「私夏が終わると消えちゃうの」
「はぁ？」
突然の意味不明な言葉に頭がついていかない。
しかし千草の表情はいたって真剣だった。
ここまで真面目な顔をしているのを見たのは初めてだ。
背筋が凍りそうになる。
「だから、バイバイ」
「なにそれ？笑えないし」
千草がすっと立ち上がる。
靴をはき、夜空を見上げている。
「楽しい夏休みをありがとう、優」

わけがわからず、混乱する。
くるりと千草が振り返る。
流れる黒い髪、背景は流星群。
「大好き」
千草はそう言うと少し笑い、きびすを返して走り去った。
まるで台風のように。

始業式

「おはよー」
寝ぼけながら階段をおりる。
「今日から学校だっていうのにいつまでぼけーっとしてるの」
母親がてきぱきと朝食の用意をしながら優に言う。
父はもう会社に出たらしくいない。
「学校めんどくせぇ」
休みたいな、と思いながら携帯を見る。
「はいはい、早くごはん食べちゃいなさい」
せかされて自分の席につき、朝食にする。

あれから何度電話してもメールをしても、
千草には連絡がつかなかった。
本当に消えてしまったのだろうか？
そんなわけがない。と、現実に戻る。
その繰り返しを何度もしていた。
あの最後の言葉を考えると、嫌気がさしたとは思えない。
臆病風なんか気にもしないあの千草が、理由も無く自分から逃げた。
あの夜は千草らしくない行動に戸惑い、しばらく放心状態で動けなかった。

ありがとう、大好き。
どっちも自分があの夜言おうと決めていた言葉。
それが先に千草の口からこぼれた。
期待しても、いいのだろうか？
優は悩む。

「よう！優！」
学校へ向かう途中で同じクラスメイトに出会う。
「元気だな」
久しぶりに会う友人は夏休み前より色黒になっていた。
「はー？夏休み終わっちまったんだぞ？元気なわけねーだろー」
ぐでっと姿勢を崩す。
苦笑いし、夏休みの間の話を聞きながら登校した。

「ところでさ、特進の千草って女子知らないか？」
近くの席のやつに聞いてみた。
教室は始業式前でざわついている。
「苗字は？」
「知らない」
「特徴とかは？」
うーん、と千草を思い出す。
「長い髪でちょっと背が高めで性格きつそうな美人」
「思い当たらないなぁ」
「その千草って子が美人なわけか。
でも特進の女子は全員顔知ってるけど、そんなやついなかったぞ？」
「え？」
頭が真っ白になる。
じゃあ千草はいったい誰なんだ？
特進というのが嘘なのか？
それとも本当に消えてしまったのだろうか？
わけがわからない。

「私知ってるよー」
前に座っていた女子が振り返る。
「特進でも成績いつもトップクラスだもん」

ほっと胸をなで下ろす。
実在するということに、安堵する。
詳しく聞こうとしたところで担任が入ってくる。
大声で体育館へ移動するように指示される。
ぼんやりとしながら、体育館へ続く渡り廊下を歩いた。
千草のことを考えながら。

ぞろぞろと他のクラスの団体に出くわす。
教師に先導されながら前を歩いていく。
ふと、1人の生徒が目に飛び込んでくる。
三つ編みを左右にしているめがね姿の女子生徒。
すぐにわかった。
千草だ。

何も考えずに、優は女子生徒の腕をとり逆方向へ走り出す。
腕をつかまれた少女は驚いて顔を上げ驚く。
優は何も言わずに、一気に誰も近づかない屋上の踊り場まで駆け上がる。
振り返って、女子生徒を見つめる。
息を切らして、俯いている。
女子生徒は千草に間違い無かった。
「嘘つき、消えてなんかない」
安堵しながら、穏やかに言う。
ふいっとそっぽを向く千草。
「始業式まる」
冷たい声。早口でそう言うと、階段へ向かおうとする。
優はとっさに手をにぎった。
「好きだ、俺も」
とても冷たい手だった。
「ばかじゃないの？」

声が震えている。
「千草のこと好き」
強い声で、しっかりと告げる。
この手を離したくは無い。
「だから、いなくならないでくれよ、寂しいだろ」
そう言いながら手を引いて抱き寄せた。
千草は小さく頷いた。

終

始業式（後書き）

これにてお終いです。
ここまで付き合ってくださって、どうもありがとうございました。
よろしければ感想など、お待ちしています！
次回作の『北風と若鳥と』も、どうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9163m/

シェイク！

2010年11月10日07時32分発行